
鈴木 浩司 (すずき ひろし)



【書名】銃・病原菌・鉄 (上・下)

【著書】ジャレド・ダイヤモンド (倉骨彰 訳)

【発行】草思社文庫

私たちはスマホや家電などがあるのが当たり前の世界に住んでいて、それがない生活は考えられない。一方で、例えばニューギニアのジャングルにはいまでも過去数百年とほとんど変わらずの生活をしている社会もある。同じ地球に暮らしているながら地域社会の発展になぜこれほどの差が生じたのか。それを解明しようというのが本書の狙いである。

本書の副題には「1万3000年にわたる人類史の謎」とあり、謎というのはなぜ世界は不均衡なのか、つまり、現代社会において一部の白人たちに富と権力が集中しているのはなぜか、人類が誕生したとされるアフリカは長い歴史があるにも関わらず、科学技術を発展させることなく世界を支配できなかったのはなぜか。その理由を各民族(人種)の(遺伝的)優劣の差に求めるのは間違いで、その社会が置かれた地理的・生物資源的要因が原因で、文化・文明の発展に差が生じ、結果として現代社会の不均衡が生み出されたことを多数の事例を挙げて検証している。ノンフィクションの読み物としては読み応えのある一冊である。本書はある種の歴史書ではあるが、欧米目線の歴史ではなく、世界の各地に散らばった人類の各コミュニティがおかれた地理的環境、言語や道具の有無、栽培または飼育可能な野生動植物が存在するかなど、様々な視点から比較考察している。

本書(原著)が書かれたのは1997年とやや古いが、その内容(歴史的事実関係)を知ることは混沌とする現在の世界情勢を理解する上での助けとなるだろう。

【書名】夜市

【著者】恒川光太郎

【発行】角川書店(角川ホラー文庫)

主人公は妖怪が開く夜市で弟を売って野球の才能を手に入れた。その後、彼はヒーローになったが、弟を売った罪悪感がずっと心に残っていた…。本書はホラーに分類されているが、ホラー的要素は妖怪が夜市を開いているこ

とぐらいで、短編ながらも読み応えのあるストーリーに感動的なラストシーン、何ら奇を衒ったところのない淡々と流れる凜とした文章は時間を忘れさせてくれる。夜市で弟を売った兄はいつか弟を連れ戻さねばとずっと考えていた。そして何も知らない友人（彼女）を連れてふたたび夜市に向かった……。教科書ばかり読んで凝り固まった脳みそをリフレッシュするには良い本です。恒川光太郎のデビュー作。同書に収録されている「風の古道」も一読の価値あり。

【書名】 ドグラ・マグラ

【著者】 夢野久作

【発行】 社会思想社、東京創元社、筑摩書房、角川文庫など

日本の探偵小説三大奇書の一つに数えられる本（らしい）。1935年に出版され、大正時代を舞台にした長編作。正直言うとかかなり難解である。いくつもの物語が重層的に入れ子状になり、時間軸が交錯もしくは循環するもあたかも一瞬の夢だったかのようにも感じられる。気合を入れて読まないで読破できないだろう。

九州帝国大学医学部の精神病棟に入院している記憶喪失の「私」はとある殺人事件に参与しているらしく、医学部教授により記憶を呼び覚まし「私」が誰なのか明らかにしていくのだが…。教授は胎児は母親のお腹の中で生命進化の歴史の夢を見るという「胎児の夢」理論（ヘッケルの「個体発生は系統発生を繰り返す」からの展開）や「脳髄は物を考えるところに非ず」理論を構築し、それによれば、精神（欲望、感情、記憶など）は脳髄ではなく全身の個々の細胞に宿り、私達の個々の細胞は先祖の記憶（特に悪夢）を受け継いでいる（輪廻転生のことか）。それを証明するために「狂人の解放治療」なるものを始める……。本作は脳みそをリフレッシュするどころか、逆にどろどろに溶かしてくれることでしょうか。著者（夢野久作）の目的は読者の精神を破綻させることではないかと思わせるほどである。

本文は以下の巻頭歌から始まる。

胎児よ 胎児よ 何故躍る

母親の心がわかって おそろしいのか

【書名】捏造の科学者 STAP細胞事件	あの日
【著者】須田桃子	小保方晴子
【発行】文藝春秋（文春文庫）	講談社

「STAP細胞事件」とは、2014年1月末に理化学研究所の小保方氏を筆頭著者とするチームがSTAP細胞発見の論文をネイチャーに発表し、その若さと女性であることも相まって、一躍「リケジョの星」としてマスコミに持ち上げられたが、すぐに数々の不正疑惑が明るみに出て、一転して「小保方氏が論文を捏造した」とメディアスクラム（メディアによる集団リンチ）が起こった「事件」のことである。

iPS細胞を超えるノーベル賞級の発見ともてはやされたSTAP細胞の発見だが、理研によるその後の検証実験ではSTAP細胞は確認できず、論文の内容については否定されている。『捏造の科学者 STAP細胞事件』は毎日新聞の科学環境部記者（須田桃子）が研究内容の解説とともに取材を元に「事件」の全容に迫ったものである。とはいえ、1研究者個人をいきなり「捏造の科学者」と言い切ってしまうのは本を売るための戦略とはいえ行き過ぎのような気もする。なぜなら執筆当時（本書あとがきは2014年11月14日付）はまだ理研による検証結果（同年12月下旬）が出ていなかったからである。もちろんSTAP細胞が再現されたとしても、彼女の数々の不正が帳消しになるわけではないが。なお、文庫版（文春文庫）では調査結果が出た後について章が追記されていて、そこでは理研や共同研究者の責任についても問うている。

『捏造の科学者…』は一人の新聞記者が「（小保方氏は）捏造した」を前提に取材・執筆をしているのかと思うと、取材に基づいて得た事実と著者の見解を明確に区別し、（同じ事件でも新聞社によって論調が異なるように）著者の見解を短絡的に追従するのではなく、別の見方をするのは物事を正しく判断する上では重要である。

そこで、関心のある人は小保方氏自身の著書である『あの日』も合わせて読んでいただきたい。『あの日』は小保方氏本人の言葉でSTAP細胞の発見とその後について、本人が言うところの事実関係、メディアスクラムの恐怖、理研や共同研究者とのやり取りや思い（本人は捏造を否定しており、では誰が…）が書かれている。両者を読み比べることで、同じ事実関係でも表現の仕方によって受け止め方が異なることに気づくと思う。『捏造の科学者…』では小保方氏本人には直接取材していないので、本人の言い分も知るべきであろう（不正に対する釈明はないが）。参考までに『あの日』の解説本として『STAP細胞はなぜ潰されたのか—小保方晴子「あの日」の真実』（渋谷一郎、ビジネス社）を挙げておく。小保方氏の文章の行間に潜む意図を汲み取って（『捏造の科学者…』との比較も含めて）解説してくれているので分かりやす

いが、こちらは小保方氏を擁護する立場なのでその点は留意して読むべきである。

この問題については他にも様々なメディア・書物で色々なことが言われているが、再現実験を強調するあまり、なぜこんな「事件」が起きてしまったのかについての背景に関する検証があまり行われておらず、共同研究者らはなぜ小保方氏の実験結果を事前に確認しなかったのだろうかという謎が残る。調査に対して共同研究者らは小保方氏のデータを確認しなかったと言い（なぜ?）、小保方氏も生データを調査委員会にほとんど提出しなかった（これもなぜ?）。結局は凡人には理解できない巨大な利権が絡み合った最先端の生命科学という舞台上で巻き起こる熾烈な競争のプレッシャーに彼女は負けてしまったということなのか。

【書名】 塩の道

【著者】 宮本常一

【発行】 講談社学術文庫

「塩の道」の他、「日本人と食べもの」、「暮らしの形と美」の三編が収録されている。

宮本常一は戦前から戦後にかけて日本中を自ら歩き回り、先々で出会った人々から話を聞き、生業や行動様式、その土地の生活様式、道具などをつぶさに観察・記録し、多数の著書にまとめた民俗学者である。宮本は単に資料を集めただけではなく、それら膨大な記録や文献資料を元に、決して歴史の表舞台には登場しない、いわゆる「庶民」とひと括りにされる人々の生きざまから日本人（庶民）や日本の文化（庶民の文化）というものがどのように形成されたのか論考を行ってきた。本書は宮本の晩年に書かれたもので、どこかの講演の記録なのか、大変読みやすい。「塩の道」では人間が生きるために必須の「塩」を（明治またはそれ以前の）人々がどのように得ていたのかについて描かれている。山の民は山の木を冬に伐採し、春の雪解け水と一緒に川に流して海まで運び、それを薪にして浜辺で海水から塩を得て、山に持ち帰る（または薪と交換に海の民に塩を作らせる）。塩が大量に得られれば、牛の背に乗せて塩をよそへ売りに行く。牛は道端の草を食わせておけば良いので（馬の場合はそうは行かないらしい）、（草が少ない）街道ではなく少し外れた小路を通って村から村に行った。また、かつては魚を塩漬けにして内陸に運んでいたが、それを買う山の民は魚がほしいのではなく、塩がほしくてそれを求める。など、ふだん気に留めることのない「塩」を軸とした人々の生活とその結果作られた「道」が描かれている。

【書名】 熱帯の自然

【著者】 A. R. ウォーレス (谷田専治、新妻昭夫 訳)

【発行】 ちくま学芸文庫

アルフレッド・ラッセル・ウォーレスは進化論のチャールズ・ダーウィンと同じイギリス出身でほぼ同時代に生きた博物学者である。ウォーレスはダーウィンとは独立に自然選択説に到達し、互いの交流を経てダーウィンの進化論の完成に寄与したとされる。本書はウォーレスがブラジルやインドネシア(マレー諸島)の熱帯林での10年以上の調査・観察を元に熱帯林の様々な動物・植物たちの形や色、生活様式(生態)を描写し、なぜそのような形や色、行動になったのかを考察している。詳細な描写のみならず、また、単なる熱帯林の探検レポートで終わらせず、そこから自分なりの考察を行っているところが興味深い。

約140年前に出版されたにもかかわらず、内容は現在でも全く色あせていない。前半では熱帯林に生育する様々な植物や動物について紹介し、後半では特に鳥類や昆虫類の色彩(雌雄で異なる色彩、擬態、警告色)や性淘汰についての多くの事例を紹介し、考察を行っている。

【書名】 博物学の時間 大自然に学ぶサイエンス

【著者】 青木淳一 著

【発行】 東京大学出版会

タイトルはやや大げさだが、本書の著者は半世紀もの間、大学や博物館の研究者として主に土壤中に生育するダニ(土壤動物)の分類・生態を研究し、多くの新種を発見してきた人物である。本書は著者のこれまでの野外調査の経験談や興味を織り交ぜ、博物学という学問の楽しさを紹介している読みやすい本である。博物学とは自然界に存在する“もの”(生き物だけではなく石なども含む)を研究する学問で自然史学ともいうが、現在では動物学、植物学、鉱物学などに細分化されている。本書では博物学の基本的作業である野外での採集、種の同定、分類のやり方が解説されているが、著者が実際に経験した全国各地での様々な野外調査の様子も描かれており、土壤中のダニというとても地味な生き物を扱っているにも関わらず大変熱い思いで研究していたことが伝わってくる。「ダニ(のようなマイナーな生き物)を研究して何の役に立つのか」と著者も自問しているが、著者なりの答えが用意されている。